

日本歴史言語学会 2026 年大会 発表要旨集

第 1 日目 12 月 5 日（土）13:30～17:30

会場：東京外国語大学 留学生日本語教育センター さくらホール

公開シンポジウム

韓国語史研究の成果と課題

企画：福井 玲

【企画趣旨】

韓国語（朝鮮語）の歴史的な研究は、日本では小倉進平、前間恭作、河野六郎などの先達によって始められ、それ以降も多くの研究者に受け継がれてきた。こうした韓国語史研究は日本の韓国語研究全体の中でも特色ある一分野となっている。また、言うまでもなく、韓国語の歴史的研究は、現在、韓国を中心とする多くの国でさまざまな方面に発展を遂げ、多くの研究者の業績が知られている。

このシンポジウムでは、日本で活動する研究者を中心として、他の言語の歴史研究者にも参考になるような形で、韓国語の歴史的研究におけるさまざまな分野の最先端の研究を紹介していく。主なテーマは次のようなものである。(1)アクセントを含む音韻や文法でこれまでにどのような成果が挙げられ、どのような課題が残されているか。(2)古代における周辺諸国との言語的な関わりはどのようなものであったか、(3)韓国語史研究の出発点をなす中世韓国語の資料にはどのような特徴が見られるか。

司会：福井 玲（東京大学）

13:30-13:40 趣旨説明 福井 玲

13:40-14:15 発表 1 福井 玲 韓国語音韻史研究における残された課題

14:15-14:50 発表 2 伊藤智ゆき（東京大学） 中世韓国語の音素配列と韻律構造

14:50-15:00 休憩

15:00-15:35 発表 3 伊藤英人（専修大学） 韓倭借用語初探

15:35-16:10 発表 4 河崎啓剛（東京大学） 韓国語文法の再発見—歴史言語学と対照言語学から—

16:10-16:45 発表 5 杉山 豊（京都産業大学） 朝鮮語史資料としての‘諺解’の諸相

16:45-16:50 休憩

16:50-17:30 全体討議

発表 1 福井 玲 韓国語音韻史研究における残された課題

Ramsey (1997: 131) はハングルが創制された 15 世紀は「韓国語の歴史において尋常ではない時期 (an unusual time in the history of Korean)」であったと述べている。筆者も同感である。この時期には、現代語にはまったく見られないような複子音(consonant cluster)や有声摩擦音が見られ、現代の標準語では失われている弁別的なピッチアクセントが存在した。

また、韓国語の歴史的な研究においては、ハングルが作られる 15 世紀以前の資料があまり多くないため、15 世紀という時期は、韓国語の歴史的な研究において 2 つの意味で出発点になる。1 つはそこからどのように現代語へと変化していったかの研究であり、もう一つはそれを基盤としてより古い時代にはこの言語の姿はどうであったかを探っていく研究である。そのような意味付けをするのにふさわしく、この時期には新たに発明された音素文字を用いてかなり豊富な資料が残されている。その意味でもこの時期は特別な時期であった。

この発表では、15～16 世紀ごろの中世韓国語（中期朝鮮語）の音韻体系の概要を紹介しながら、未解決の問題としてどのようなものが残されているかをまとめ、それに関連して、有声摩擦音の出現に関する問題、現代語には見られない語末子音の問題などを中心に論ずる。

Ramsey (1997) The invention of the alphabet and the history of the Korean language, in: Kim-Renaud, Young-Key, ed. *The Korean Alphabet: Its History and Structure*. University of Hawai'i Press, pp. 131-143.

発表 2 伊藤智ゆき 中世韓国語の音素配列と韻律構造

Ramsey (1991) は、中世韓国語（中期朝鮮語）の名詞・動詞語幹に基づく内的再構により、弁別的ピッチアクセントをもつ中世韓国語と異なり、韓国語祖語にはピッチ、音長、ストレスによる区別はなく、語幹（もしくは形態素）の最終音節に自動的にプロミネンスが付与されることによりピッチパターンが決定していた、という仮説を立てた。筆者もまた、Ito (2013) において、中世韓国語資料に基づき韓国語祖語の内的再建を試み、Ramsey の仮説を支持する結果を得るとともに、中世韓国語は右→左方向の iambic プロミネンス体系を持つことを提案した。本発表ではこれらの研究の延長として、分析対象を 1～4 音節名詞語幹、1・2 音節動詞語幹（明らかに複合語幹、漢字語と見られるものは除外）に拡大し、以下の点について検討する。

- (1) 同一調音位置の共起を避ける OCP (Place) の有無
- (2) 音節位置に応じた分節音の出現に関する制約
- (3) 音節接触法則 (Syllable Contact Law) との関連性
- (4) 有声摩擦音・最小母音の分布、音調パターン等から考えられる、祖語もしくは中世韓

国語以前の段階における韻律構造に関する再考察

特に有声摩擦音の出現に関しては、①有声阻害音と無声阻害音の対立に由来するという説 (Ramsey 1991)、②子音弱化説 (Martin 1996)、③NC クラスタ対 C に由来するという説 (Vovin 2003) など、さまざまな仮説が提案されたものの、それぞれについて問題点が指摘されている。本発表ではこれまでの研究を振り返ると共に、通言語的に特異である中世韓国語の韻律構造について考察を試みる。

Ito, Chiyuki. (2013). Korean accent: Internal reconstruction and historical development. *Korean Linguistics* 15(2), 129–198.

Martin, Samuel E. (1996). *Consonant Lenition in Korean and the Macro-Altaic Question*. University of Hawai'i Press.

Ramsey, S. Robert. (1991). Proto-Korean and the origin of Korean accent. *Studies in the historical phonology of Asian languages*. In William G. Boltz and Michael C. Shapiro (Eds.), John Benjamins, 215–238.

Vovin, Alexander. (2003). Once again on lenition in Middle Korean. *Korean Studies*, 27, 85–107.

発表3 伊藤英人 韓倭借用語初探

発表者は 2019 年以来数編の拙論で、①いわゆる「高句麗地名」には韓語及び倭語の要素が含まれ、それらが朝鮮半島でモザイク状に分布している、②3 世紀から 8 世紀の資料にもさらにいくつかの朝鮮半島の固有名詞に倭語がある、③朝鮮半島に分布する倭語を「大陸倭語」と名付け、その話し手は統一新羅で「靺鞨国民」と称された濊人である、④濊人は殷代には中国沿海部から朝鮮半島に到達し、754 年の地名改正時に大陸倭語の音仮名表記をその意味を表す漢字に改正できたことから、少なくとも 8 世紀半ばまで大陸倭語が話されていたと考えられる、⑤大陸倭語は韓語との接触によりその文法を韓語化させ、その言語が水田農耕とともに日本列島にもたらされ、列島倭語（＝日琉語）へと分岐した、⑥大陸倭語と列島倭語の共通祖語として「濊倭祖語」を措定する、⑦1000 年以上にわたる倭語と韓語の接触により相互間に語の借用が行われた、といったことを論じた。

本稿は拙論「韓倭関係語探源」（2023）を加筆修正し、時代の下限を下げ、より多くの借用語について論じる。

借用の方向は、①どちらの言語に単語家族を多く持つか、②語形とアクセント、③朝鮮半島から列島にもたらされた新物新語であるか否かなどによって判断した（発表時には語例は増える可能性がある）。なお、「城 *ki」（百濟王族語）、「鉛 *namər」「高句麗地名」語のような非韓

語からの借用語は対象外とする。

韓語から倭語への借用

「畑 *patəh」「徴 *pat-」「串 *kuts」「苧 *musi」「鶴 *tyrym」「媼、夫 *sei～*sen」
「身 mum」「葵 *apuk～*apup」「束 *tapar」「稗、稻 *piɛ～*piə」「為 *hjə-」
「美 *kup-」「如 *kət」「吉師 *kejtsə」「城 *tsas」「釧 *kyser」「楮 *tak」
「味噌 *mjɛdzu」「寺 *tjer」「村 *seikyr」「伽耶（地名）、江 *kara」
「合浦（地名） *kərp-karih」など

倭語から韓語への借用

「木、株 *kər」「島 *sima」「瓜 *uri」「梁、門 *tor～*tur」「雲、晦、暮 *kur-」
「蟹 *kani」「釜 *kama」「鍋 nampi」「甘藷 kokuma」など

あたかも同系言語の同源語のように見えるもの

「朝、浅 *ats-」「和、柔、親 *nik-」など

不明

「沼 *nun」「賺 *suk-」「子 *kə～*ko」「日 *ka～*ko～*həj」「苧 *musi」など

放浪語等

「熊 *kuma」「口、顎 *akyr」「鯨 *kudadi」など

発表4 河崎啓剛 韓国語文法の再発見—歴史言語学と対照言語学から—

日本語と韓国語の文法は、特に歴史的に対照する時、本来は互いに異質な体系であったことを窺わせる著しい相違点を多数示す一方で、例えば動詞活用に組み込まれた組織的な敬語法のような顕著な類似点も認められる。伊藤英人(2021a, 2021b, 2023, 2024)は、朝鮮半島に分布した「大陸倭語」が韓語との接触を通じてその文法を「韓語化」させたのち日本列島にもたらされたとする仮説を提唱した。本発表では、この仮説の核心をなす「倭語文法の韓語化」、すなわち韓語から倭語への構造借用(structural borrowing)プロセスの存在を、日本語の成立を考える上での有力な作業仮説として受け入れ、その観点から発表者による韓国語史・歴史的日韓対照研究の成果と今後検討すべき諸問題を整理することを試みる。

本発表の第一の目的は、現代語のみの比較からは見えにくく、日本の言語学・日本語学では必ずしも広く知られていない歴史的日韓対照の諸現象を紹介することである。具体的には、両

言語の敬語法に共通して見いだされる「再帰的客体尊敬語」、日本語形容詞終止形「し」と韓国語 *hanta* の対照、韓国語の動詞派生接尾辞 *-i-* と日本語の二段活用形成過程に再構される **-i-*、日本語の完了助動詞「ぬ」「つ」と中世韓国語の *-ke-*、*-a-* の並行性および両者にみられる「確述用法」などを取り上げる。とりわけ敬語体系のあり方の違いや日本語における形容詞の用言化は、両言語の類似がいかにかに成立したかを考える上でも示唆的である。

第二の目的は、こうした諸現象を個別に見るにとどまらず、「倭語文法の韓語化」仮説のもとに鳥瞰してみることで、それらを全体として整合的に位置づけ得るという展望を示すことである。仮説の立証は容易でなくとも、少なくともこの仮説は日本語文法の根幹を見つめ直す重要な視座を提供しており、同時に個々の対照研究をさらに深める意義をも物語っている。本発表を通じて、韓国語史研究が日本語成立史を含む東アジア歴史言語学にも新たな資料や仮説を提供し得ることを示すとともに、日本語史研究において、古来最も密接な関係にあった隣接言語である韓国語の歴史資料がこれまで十分に活用されてきたのかという問題を改めて提起したい。

伊藤英人(2021a), 濊倭同系論, 古代文字資料館『KOTONOHA』第 224 号.

伊藤英人(2021b), 朝鮮半島における言語接触と大陸倭語, 『日本言語学会第 163 回予稿集』, 日本言語学会, 354-359.

伊藤英人(2023), 韓倭関係語探源, 古代文字資料館『KOTONOHA』第 248 号.

伊藤英人(2024), 大陸倭語と日本語の起源, 『国際コミュニケーション研究』3, 専修大学国際コミュニケーション学部, 72-85.

発表5 杉山豊 朝鮮語史資料としての‘諺解’の諸相

ハングル創制の後、約 1 世紀半の間に世に出された中世朝鮮語ハングル文獻のうちで、多くの比重を占めてゐるのは、所謂‘諺解’といふ様式を取る一群の書物である。‘諺解’とは、中國語で著はされた原典に對する讀解、學習の助けとして、朝鮮語により施された翻譯、注釋を意味する。原典の中國語は、文言、すなはち文語と、白話、すなはち口語とのいづれをも含み、かつ、譯解の對象となる原典は、中國撰述のものに止まらず、朝鮮で撰述されたものも、ここに加はる。

このやうに、一種特殊の目的と過程とによつて、獨特の體裁を備へて生み出された朝鮮語のテキストには、言語的にも種々の興味深い様相が認められる。本発表では、漢文の‘讀み上げ’と‘讀み解き’といふ大きく二つの觀點から、‘諺解’資料の朝鮮語のもつ特色について探つてみる。併せて、後世、近現代に至るまでの朝鮮語の書記言語形成に、‘諺解’の果たした役割りについても、考察を試みたい。

第2日目 12月6日(日) 10:00~11:55, 13:30~16:20

会場：東京外国語大学 留学生日本語教育センター さくらホール

10:00~10:35

口頭発表1 和田有梧(東京外国語大学)

Bal Bod gnyis kyi skad gsal ba'i me long に記録された近代チベット語とネワール語: 自己知標識 (egophoric) の熟知用法に着目して

司会: 西田文信(早稲田大学)

現代チベット系諸語では、自己知識を標示するコピュラ動詞が、主節述語に現れる他の証拠性標識と対立する (cf. Tournadre & Suzuki 2023: 389-391)。本発表では *Bal Bod gnyis kyi skad gsal ba'i me long* (以下 *BBSM*, Cuppers et al. 1996) における近代共通チベット語 (以下「近代語」) の自己知標識の用法を、同資料に記録されたカトマンズ・ネワール語の動詞と対照する。従来の近代語研究は、西洋人が著したチベット語資料を基に行われてきた (和田 2026, Wada forthcoming)。言語形式の観点から見れば、近代語の証拠性体系は現代語と概ね同一だが、意味機能の点では、とりわけ自己知標識の用法に差異が認められる。現代語の自己知標識は、自己に関する事柄や、自己が意図的に引き起こした事柄を表し、原則として一人称を含む平叙文、及び二人称の疑問文に現れる (San Roque et al. 2018: 5 の egophoric distribution)。一方、1950年代以前の西洋資料では、自己知標識の「熟知用法」も頻繁に見られ、一人称や二人称と共に起しない傾向が現代語より顕著である。自己に属さない他者について述べる「熟知用法」は、19世紀から20世紀初頭に成立した *BBSM* でも複数回在証される。チベット語話者用のネワール語学習資料である *BBSM* では、両言語が合計1459の語彙項目及び短文を通して対照される。言語類型論、及びチベット・ビルマ諸語の記述研究は、ネワール語動詞の順接形 (conjunct) を、チベット系諸語の自己知標識と比較してきた。しかし先行研究は、*BBSM* の著者がチベット語の証拠性標識をどのようにネワール語訳したのか検討していない。そこで発表者は、*BBSM* におけるチベット語自己知標識の全用例について、対応するネワール語の形式を分析した。その結果、等位コピュラ <yin> は85件中33件、存在コピュラ <yod> は19件中14件が、順接形と対立する離接形 (disjunct) で翻訳されている点が判明した。また、離接形で訳された <yin>、<yod> 47件中38件は egophoric distribution から逸脱しており、これは(1)、(2)のような熟知用法の例を含んでいた。本発表のデータは、当時のネワール語には現代と同様 (Hargreaves 2005: 6)、熟知用法が存在しない点を示唆する。一連の知見は、自己知標識の通言語的多様性や通時的变化の解明に貢献しうる。

- (1) a. 近代共通チベット語
mi=la dug sbyin-na sdig pa chen-po yin
 person=LOC poison give-COND sin big-ADJ EQ.EGO
- b. 近代カトマンズ・ネワール語
manū-yata bikh biu-sā pāp taḥdham-gu
 person-DAT poison give.IPFV.NEGO-COND sin big-NMLZ
lā-i
 occur-NPST.NEGO
- ‘If one gives someone poison, it is a great sin.’
 (Cuppers et al. 1996: 53, ハイフンとグロスは発表者)
- (2) a. 近代共通チベット語
sleb yod=dam med=dam
 arrive EX.EGO=Q EX.EGO.NEG=Q
- b. 近代カトマンズ・ネワール語
thyan-a=lā ma-thyam ni=lā
 arrive-PFV.NEGO=Q NEG-arrive.IPFV.NEGO still=Q
- ‘Did (he) arrive or not?’
 (Cuppers et al. 1996: 90, ハイフンとグロスは発表者)

Leipzig Glossing Rules 外の略号

EGO: 自己知標識 (cf. NEGQ 非自己知/離接形), EQ: 等位コピュラ, EX: 存在コピュラ

参考文献

- Cuppers, Christoph, Kashinath Tamot & Philip Pierce (1996) *A Tibetan-Newari Lexicon Cum Phrase Book*. Bonn: VGH Wissenschaftsverlag.
- Hargreaves, David (2005) ‘Agency and Intentional Action in Kathmandu Newar.’ *Himalayan Linguistics* 5: 1–48.
- San Roque, Lila, Simeon Floyd & Elisabeth Norcliffe. (2018) ‘Egophoricity: An introduction.’ In: Simeon Floyd, Elisabeth Norcliffe & Lila San Roque (eds.) *Egophoricity*, 1–78. Amsterdam: John Benjamins.
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (2023) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan*. Villejuif: LACITO-Publications.
- 和田有梧 (2026) 「近代中央チベット語ラサ方言における「有声帯気音」と喉頭対立の推移: 欧文資料を用いたチベット語史研究」『言語記述論集』20:227–298.
- Wada, Yugo (forthcoming) ‘The factual -PAS in Thomas Herbert Lewin’s A Manual of Tibetan: A non-Lhasa innovation in the late-19th century Sikkim ‘Common Tibetan’.’ *Kyoto University Linguistic Research* 45.

10:40～11:15

口頭発表 2 河原亮（無所属）

上古・口蓋垂音 /*g-/（おおむね中古・云母，匣母 /*fi-/）の漢代における残存状況

司会：西田文信（早稲田大学）

本発表では中国語の上古音にあったとされる有声口蓋垂破裂音 /*g-/ (潘悟云 1997)(Baxter & Sagart 2014)の漢代における残存状況について議論する。この音はおおむね中古音の云母 /*fi-/ に対応するか、または匣母 /*fi-/ に合流し、少数が以母 /*j-/ に合流する。これらはほとんどが合口(中古 /*-u-/)を持ち(雅洪托夫謝 1986), 後漢期の仏典漢訳資料においてインド系言語の v の音訳に用いられることから、後漢期には中古音に近い /*w-/ や /*yu-/ が想定されている (Schuessler 2009)。しかし、漢代の文献資料中で外国語の軟口蓋ないし口蓋垂破裂音の音訳に用いる例があることから、一部で /*g-/ が漢代に残っていたことを示唆する説もある(潘悟云 1997)。本研究では漢代文献中の通仮例、史書の音訳語、音注、声訓および仏典漢訳を収集、分析し、後漢期においても一部で /*g-/ が残っていたことを確認するとともに、その条件（非 3 等/3 等の区別、方言、漢代の途中での変化）について議論する。また収集、電子化したデータセットについても紹介する。先行的な結果としては、上古 /*g-/ をもつ字（語）のうち 3 等の方で軟口蓋破裂音との類似性が見られ、/*g-/ が後漢期まで残ったと見られること、一方非 3 等では漢代を通して /*g-/ が存在した痕跡が無く中古音と同様の摩擦音と見られること、などが分かった。こうした結果は、合流を起こしている頭子音についての上古音の再構に有用なエビデンスの増加につながるほか、上古音の口蓋垂音クラス /*q-, *g-, *qʰ-/ が全て喉音に変化するに至るメカニズムの解明に役立つことが期待される。また応用上は、漢代文献に現れる外国語の音訳を介した隣接地域の歴史および言語研究への寄与が考えられる。

参考文献

潘悟云. 1997. 喉音考. 《民族语文》 5, 10–24.

Baxter, William H. & Laurent Sagart. 2014a. *Old Chinese: a new reconstruction*. New York: Oxford University Press.

Schuessler, Axel. 2009. *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese: A Companion to Grammata Serica Recensa* (ABC Chinese Dictionary Series). Honolulu: University of Hawaii Press.

雅洪托夫謝・葉. 1986. 上古汉语的起首辅音 w. In Sergei Evgen'evich ĪAkhontov, 唐作藩 & 胡双宝 (eds.), 《汉语史论集》, 166–174. 北京: 北京大学出版社.

11:20～11:55

口頭発表 3 海田皓介（明治大学）

西ゲルマン語における文脈導入の定型表現

司会：入江浩司（金沢大学）

西ゲルマン語の古英語（700–1100 年）、古サクソン語（800–1150 年）、古高ドイツ語（750–1100 年）の詩において、詩人は重要な話題を導入すべく定型表現（formula）を用いる。諸先行研究によれば、この表現には下の各言語の例(1)–(3)のように「(～ということを) 聞き知っている」を意味する動詞が用いられる（用例の下線と訳は発表者による）。

(1) *Beowulf* 2: [Wē] gefrūnon ‘We have heard’ (Klaeber 1950: 1)

(2) *Heliand* 288: Sô gifragn ik ‘So I have heard’ (Behaghel & Taeger 1996: 17)

(3) *Hildebrandslied* 1: Ik gihorta dat seggen ‘I have heard it told’ (Braune 1969: 84)

一方、(4)(5)のように古高ドイツ語の脚韻詩（Kartschoke 1975: §2.2）でも似た表現がある。

(4) *Christus und die Samariterin* 1: Lesēn uuir ‘We read’ (Braune 1969: 136)

(5) *Psalm 138* 1: Uellet ir gihören [...]? ‘Will you hear [...]?’ (Braune 1969: 138)

McLintock & Hartmann (2013: 74)によれば、「読む」という動詞を含む(4)の句は(3)を想起させる。また同じ動詞による表現が古サクソン語 *Homilie Bedas* (Gallée 1894: 118)の開始部分にもある。時代は変わるものの、(5)のように法助動詞‘will’と動詞‘to hear’による表現は初期中英語（1100–1300 年）*Iacob and Iosep* (Napier 1916: 1) や中低ドイツ語（1150–1600 年）*Lied auf Christi Kreuzestod* (Stammmler 1921: 97, 藤代他 1987: 154) にもある。これより、ゲルマン語間の定型表現の共通性に分析の余地があることが示唆される。

先行研究は数例の記述に留まり、文脈導入の定型表現の特徴を総合的に扱ったものは見られない。そこで本研究は定型表現の構造を分析し、次の点を明らかにする。詩人は定型表現により自らが話を主導する役割を示す。時に 1 人称複数や 2 人称の代名詞を含み、聴衆との一体感を作り話題の導入を容易にする。またこの表現は異なる詩の型に柔軟に対応し、話者が話題の重要性を聴衆に印象付ける（cf. Nelson 2009: 491）手段となる。

参考文献

Behaghel, Otto & Burkhard Taeger, eds. 1996. *Heliand und Genesis*. 10th ed. Tübingen: Max Niemeyer.

Braune, Wilhelm, ed. 1969. *Althochdeutsches Lesebuch*. 15th ed. Tübingen: Max Niemeyer.

- Gallée, Johan H., ed. 1894. *Altsaechsische Sprachdenkmaeler*. Leiden: E. J. Brill.
- Kartschoke, Dieter. 1975. *Altdeutsche Bibeldichtung*. Stuttgart: Metzler.
- Klaeber, Frederick, ed. 1950. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*. Boston: D. C. Heath.
- McLintock, David R. & Heiko Hartmann. 2013. “Christus und die Samariterin”. *Althochdeutsche und altsächsische Literatur*. Ed. Rolf Bergmann. Berlin: De Gruyter. 73–76.
- Napier, Arthur S., ed. 1916. *Jacob and Iosep*. Oxford: Clarendon Press.
- Nelson, Marie. 2009. “Prefacing and Praising: Two Functions of ‘Hearing’ Formulas in the *Beowulf* Story”. *Neuphilologische Mitteilungen* 110: 487–495.
- Stammler, Wolfgang, ed. 1921. *Mittelniederdeutsches Lesebuch*. Hannover: P. Hartung.
- 藤代幸一・檜枝陽一郎・山口春樹. 1987. 『中世低地ドイツ語』. 大学書林.

13:30～14:05

口頭発表 4 宋歌（東北大学大学院）

江戸後期口語文と明治期口語文の文体史的系譜—江戸講義物の影響を中心に—

司会：平子 達也（南山大学）

日本語文体史では、演説・新聞・雑誌文章を含めた明治期の日本語口語文はいわゆる「標準語」と呼ばれる現代共通口語の形成にとって重要だと考えられており、その明治期口語文の文体はおそらく江戸時代の口語文を引き継ぐことによって形成されたと考えられる。森岡健二(1980)「口語史における心学道話の位置」(『国語学』123)では標準語の成立において「抄物→江戸講義物→明治講義物→演説→標準語」の流れを想定し、口語の系譜を辿ろうとする場合に、個人的性格を排除した中立的な口語資料として、江戸講義物、すなわち江戸期に実際に行われた講義の口語体記録の重要性を示した。しかし、江戸期のどのような口語文が明治期のどのような口語文に影響を与えたのかは十分に明らかになっていない。そこで本発表では、江戸講義物の文体はどのような明治期口語文に影響を与えているのか、その系譜を明らかにする。

調査対象としては、江戸時代後期（1780 年以降）に成立した江戸講義物である講本（国学者平田篤胤の講義の記録）・国字解（漢籍を講釈する講義の記録）・心学道話（江戸期の石門心学思想の講義の記録）を扱う。調査方法は宋歌(2024)「明治期演説資料に見られる文体類型及びその特徴」(日本歴史言語学会 2024 年大会)を参考とし、文体を判断する指標として否定形式、断定形式を用い、さらに階層的クラスター分析を用いて文体類型を整理し、明治期口語文（演説・明治講義物・雑誌文章・小新聞）の文体との系譜を描き出す。

その結果、江戸講義物には以下の類型Ⅰ～Ⅳの四つの文体類型が見られる。

類型Ⅰ：講本『古道大意』『出定笑語』の「ぬ系」・「でござる」・「じゃ」を多用する文体

類型Ⅱ：国字解『唐詩選国字解』の「ぬ系」・「である」・「じゃ」を多用する文体

類型Ⅲ：心学道話『鳩翁道話』の「ぬ系」・「じゃ」・「でござります」を多用する文体

類型Ⅳ：心学道話『松翁道話』『道二翁道話』の「ぬ系」・「じゃ」を多用する文体

江戸講義物と明治期口語文の文体の系譜としては、江戸講義物の類型Ⅰの文体は明治 10 年代前後に成立した開化啓蒙を宣伝する口語出版物である明治講義物の「ぬ・でござる」文体に引き継がれる。類型Ⅲの文体は明治期の宗教・政治関連の演説・小新聞の「ぬ・でござります」文体に部分的に引き継がれる。類型Ⅱ・Ⅳの文体の系譜は不明だと判断されるが、類型Ⅱの文体は明治期の演説・小新聞・雑誌文章の「ぬ・であります」文体、「ない・であります・です」文体との関連性がある可能性がある。

参考文献

宋歌(2024)「明治期演説資料に見られる文体類型及びその特徴」日本歴史言語学会 2024 年大会.
森岡健二(1980)「口語史における心学道話の位置」『国語学』123,pp.21-34.

14:10～14:45

口頭発表 5 シモン・ゴンサルベス（総合研究大学院大学）

日琉諸語におけるインバーシブ派生—通時類型論的な観点から—

司会：平子 達也（南山大学）

本発表は、日琉諸語における動詞のインバーシブ派生が歴史的にどのように発展してきたのかを明らかにする。インバーシブ (inversive, Jacques 2021: 842-43)、または perspectivization (Creissels 2024: 498, 538-540) とは、3 項の（広義での）授受動詞において、A 項と R 項（あるいは SOURCE と RECIPIENT の意味役割を担う項）を交替させる動詞派生・構文 (valency operation) である。本発表では、インバーシブをその派生の方向性によって「外向インバーシブ」(exoactive inversive) と「内向インバーシブ」(endoactive inversive) の 2 種類に大別する。それぞれを (1) に例示する。

(1) a. 外向インバーシブ（沖縄語）：kajun「借りる」→ karasjun「貸す」

b. 内向インバーシブ（中世日本語）：saduke-「授ける」→ sadukar-「授かる」

インバーシブ専用の標識を持つ言語が管見の限り存在しないせいもあってか、インバーシブは類型論的範疇として十分に確立しておらず、用語も定まっていない。Zúñiga & Kittilä (2019) のような結合価交替を網羅的に扱うモノグラフにも言及がなく、二重他動詞の類型

論的研究 (Malchukov et al. 2011 等) でもこのような派生が注目されることは少ない。使役交替の研究においてもその位置づけは一定しておらず、例えば Haspelmath (1993) では日本語の *osie-* :: *osowar-* が取り上げられるのに対して、日本語の使役ペアを網羅する Narrog (2016) では、このような派生は明示的に除外されている。

そこで本発表では、インバーシブ派生が比較的豊富である日琉諸語を対象に、10 個以上の異なる動詞語根について、その派生の通時的方向性を検討する。その結果、日琉祖語に内向インバーシブを再建する根拠は認められず、インバーシブ派生は日本語派と琉球語派において異なる発達を遂げたことを示す。即ち、琉球語派では内向インバーシブが発達せず、使役標識を用いた新たな外向派生や既存の授受動詞ペアの再派生が盛んに行われてきたのに対して、日本語派では、既存の自他對との類推により内向インバーシブ派生が発展したことを示す。さらに、日琉諸語の二重他動詞が基本的に *indirective alignment* を呈しており、二重他動詞構文の A 項と R 項がそれぞれ他動詞の使役構文における使役者と被使役者と同じ格をとることが、使役派生が外向インバーシブとして再分析される条件の一つであることを主張する。

以上の分析は、日琉諸語における授受動詞の派生史を明らかにするとともに、従来の結合価交替の類型論では十分に注目されてこなかったインバーシブという派生を類型論的研究の対象として明確に位置づけるものである。最後に、他の語族 (印欧語族、シナ・チベット語族・オーストロネシア語族等) に見られるインバーシブ派生との簡単な比較を行い、日琉諸語で観察される発達の類型論的位置づけを検討する。

参考文献

- Creissels, D. (2024). *Transitivity, Valency, and Voice*. Oxford University Press.
- Haspelmath, M. (1993). More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In Bernard Comrie & Maria Polinsky (eds.), *Causatives and transitivity*, 87-120. Amsterdam: Benjamins.
- Jacques, G. (2021). *A grammar of Japhug*. (Comprehensive Grammar Library 1). Berlin: Language Science Press.
- Malchukov, A., Haspelmath, M. & Comrie, B. (2011). *Studies in Ditransitive Constructions: A Comparative Handbook*. Berlin, New York: De Gruyter Mouton.
- Narrog, H. (2016). 8. Japanese transitivity pairs through time – a historical and typological perspective. In T. Kageyama & W. Jacobsen (Ed.), *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond* (pp. 249-288). Berlin, Boston: De Gruyter Mouton.
- Zúñiga, F. and Kittilä, S. (2019). *Grammatical Voice*. Cambridge: Cambridge University Press (Cambridge Textbooks in Linguistics).
-

15:05～15:40

口頭発表 6

白鳥詩織（京都大学大学院）

日本諸語からみる日琉祖語の強勢配置

司会：平子 達也（南山大学）

近年、尹熙洙によって日琉祖語に強勢体系が再建できるとする予想が提唱されたが(尹熙洙 2025, 2026), 強勢配置の詳細は未解明である。その大因は、日琉祖語の強勢を保存する子孫言語が現存せず、主として音節脱落の観察と極めて思弁的な内的再建を根拠とするしかないことにある。本発表は、はじめに日琉祖語の強勢配置の観点から従来知られた仮説を再解釈することで、低起語に弱強格が、高起語に強弱格が存在したとする仮説を示す。

1. 低起類の複合語アクセント（五十嵐 2023）の不自然な多様性、特定の組合せの欠如、後部要素が高起無核の低起複合語における第二音節の母音脱落など、中古日本語の内的再建によって得られる音調のみによって説明困難な諸現象は、低起類が強勢衝突を誘引する弱強格の強勢配置を有したとする仮定により説明できる。
2. 尹熙洙（2025, 2026）が先日琉祖語で起きたと予想した低起語の母音脱落に伴った式の逆転現象は、大幅に新しく、肥筑祖語の分岐後にも見られる（白鳥 2026）。逆転現象を説明可能な強勢が伴う音調（尹熙洙 2025.6.18, p.c.）は、西南九州二型アクセント諸語のアクセント祖体系として設定できる。式の逆転は強勢衝突を処理する音韻規則によって説明できることになる。

如上の強勢配置のもとでは、従来顧みられてこなかった琉球弧の外側の日琉諸語（non-Ryukyunesian Japonesian）の不規則な濁音化（蜂矢 1994）、形容詞語幹の長音（新田 2006）、母音脱落の傾向性などを説明できる可能性がある。さらに日琉祖語の閉音節構造（cf. 尹熙洙 2025）を導入すると、八母音仮説における反映の分裂（白鳥 2025）を説明できる可能性がある。日琉祖語に強勢を再建し、分節音と韻律の比較を統合することが必要である。

《引用文献》

蜂矢 真郷（1994）「～キと～ギ」．『萬葉』 150: 1-36.

五十嵐 陽介（2023）「日琉祖語四声仮説」.

白鳥 詩織（2025）「日琉祖語の第八母音の提唱」．日本歴史言語学会 2025 年大会.

白鳥 詩織（2026）「上代東国語における疑似有坂・池上法則」日本言語学会第 173 回大会.

新田 哲夫（2006）「方言に見られる形容詞語幹の長母音」『石川県白峰方言の調査研究と方言語彙のデータベース化』 1-38.

尹 熙洙 (2025)「日琉祖語の子音連結」『国立国語研究所論集』29: 189-202.

尹 熙洙 (2026)「日琉諸語の一員としての宮古語音韻史」. 総合研究大学院大学博士学位論文.

15:45～16:20

口頭発表 7

西村康平 (青山学院大学)

『万葉集』地名字音表記の音韻制約による分析

司会：平子 達也 (南山大学)

本研究の目的は、『万葉集』歌部分に現れる地名表記の分析を通して、字音表記と発音の関係およびその背後にある音韻文法の特徴を明らかにすることである。個々の地名の発音と、それを示す字音表記との間の乖離は、音韻文法から見て概ね自然な説明が可能であることを理論的に示し、こうした表記の仕組みが音韻文法の強い影響下にあったことを主張する。

理論的な枠組みとして、普遍的な制約群およびそれらの優先順位が自然言語の文法の中核をなすと考え、最適性理論(Prince & Smolensky 1993)を用いる。特に、McCarthy & Prince (1995)にて提案された「対応(Correspondence)」の概念を、字音表記(中古音)が本来持つ音韻構造と、それによって示される地名の発音の関係に当てはめて検討することにより、両者の間の音韻的な乖離を忠実性制約の違反として分析する。またその違反は、当時の日本語音韻論においてより重要な制約を満たすためには許容されていたものだと解釈でき、文法の概略を推測することが可能である。

『万葉集』の歌部分には、字音を用いた地名表記が 497 の異なる表記形(計 1,259 字)、のべ 914 回の出現(計 2,203 字)が認められる。本研究では、個々の地名における字音表記と発音の音韻的乖離を 6 パターンに分類し分析を行う(cf. 大野 1962、沖森 2007 など)。具体例を以下に示すとともに、乖離を説明しうる音韻操作も便宜的に併記する：

- | | | |
|---|---------------|-----------|
| a. 子音削除：kiet → ki | <u>吉備</u> きび | 巻 4-554 |
| b. 子音結合：?ien ₁ n ₂ am → in _{1,2} ami | <u>印南</u> いなみ | 巻 7-1178 |
| c. 母音挿入：nan → nani | <u>難波</u> なにわ | 巻 2-229 |
| d. 母音交替：i ^w at → woti | <u>越</u> をち | 巻 2-194 |
| e. 子音交替：tsiuen → suru | <u>駿河</u> するが | 巻 3-284 |
| f. 母音融合：k ⁱ ₁ ?i ₂ → ki _{1,2} | <u>紀伊</u> き | 巻 13-3302 |

例えば、(a)はいわゆる「略音仮名」であるが、音韻制約を用いた分析では対応関係にある構造間での子音削除を禁止する MAXIMALITY-C の違反が生じていると見なすことができる。この違反は、音節末子音を禁止する有標性制約 NoCODA が、当時の日本語文法ではより上位にあったと考えるのが妥当である。同様に上記 6 パターンは、MAXIMALITY, DEPENDENCY, IDENTITY, UNIFORMITY, INTEGRITY といった忠実性制約の違反として解釈可能であり、それらは NoCODA や

*LONGVOWEL など、当時の日本語の音節構造および母音・子音体系を規定する有標性制約を満たすために許容されていたと推測できる。

こうした分析手法のみでは説明が困難な字音地名表記の事例は、『万葉集』全 20 巻を通して 4 表記形、のべ 13 回の出現にとどまり、全体数に比較し非常に少い。大部分は普遍的な音韻制約の相互作用の帰結として自然に説明することが可能であり、『万葉集』の字音表記が音韻文法の強い影響を受けた、優れた表音記号体系であったことを示している。

参考文献・史料

大野透 (1962) 『萬葉仮名の研究』 明治書院

沖森卓也(2007) 「古代の地名表記」 『日本古代の文字と表記』 吉川弘文館, pp.316-333.

McCarthy, J. & A. Prince. (1995) Faithfulness and Reduplicative Identity. In *UMOP 18: Papers in Optimality Theory*, eds. Jill Beckman, Laura Walsh-Dicky, & Suzanne Urbanczyk, pp. 249-384. Amherst, MA: University of Massachusetts, GLSA.

Prince, A. & P. Smolensky (1993) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Ms, Rutgers University, New Brunswick and University of Colorado, Boulder.

国立国語研究所 (2017) 『日本語歴史コーパス 奈良時代編I 万葉集』 (2026 年 8 月 20 日確認)